

沖

7
2018

俳句雑誌【33巻】



筆致

能村 研三

そこで詠む

ホツチキスの空鳴りの音余花ぐもり

終ひなる葉叢ごもりの朴一花

浮巢見の舟音鎮め煙雨中

濡れ縁の木目干割れし夏安居

先日横浜で開催された沖の関東大会は、この会としては珍しく当日出句の吟行会であった。桜木町駅に集合、大棧橋に向かう途中、「太平洋の白鳥」と呼ばれた帆船日本丸が係留展示される公園があった。当日は土曜日で残念ながら、総帆展帆の日でなく、皆は口々に一日違いで見られなかったことを残念がついてた。二十九枚の帆を全て広げると美しい船の白鳥の優美な姿が見えたことであろう。しかし、悔し紛れではないが、帆を張っていないことで、林立するマストが空に伸びている姿もすばらしい風景である。

初夏や帆なき帆柱天を衝く

大沢美智子

当日の私の特選句で、この日この時の日本丸を詠んだ句である。吟行会で作る句について「そこを詠む」のではなく「そこで詠む」句でなくてはならないと言われる。掲句は正に「そこで詠んだ句」であることは紛れもない。

吟行会はその場で俳句を作らなければならず、十分に推敲が出来ないので、事前に見下して素材をあらかじめ仕入れておく用意周到な人もいる。また吟行に出かける前にその地のパンフレットや案内

かたくりのうつむき咲きの雨中かな

哀れ名にまけず地獄の釜の蓋

黄柏葉をいたたく峡の若葉冷

ヒマラヤ杉の錐深くして登四郎忌

創刊の筆致たしかに芒種かな

梅雨兆す上野の杜の廃駅跡

書をよく読む予習派もいる。私も初心の頃はそんな経験をしたので、それを全く否定するものではないが、知識だけで俳句にしようとするのもどうかと思う。

だいぶ前の話だが、埼玉県の高麗川の中着田で吟行会をするようになった。例年の曼珠沙華の開花日に合わせてその日を設定したのだが、その年は開花が遅れて一つも咲いていなかった。しかし、咲いていなければその風情を皆が詠んだのは感心した。吟行というのは想定外のことにも必ずあることで、その真実の強さを詠むことで行かなかった人にも感動が伝わるのである。

若 鮎

森岡 正作

腹の泥乾いてゐたり孕鹿

五月来る手帳にあまた紙挟み

若鮎の跳べば光となるばかり

玉菜割る昔はありし大所帯

噴水に突つ支ひ棒のなかりけり

夫呼んで夫に傾げる蓴舟

螢火のひとつは胸に仕舞ひおく

九州が梅雨入りしたという。もうすぐ関東も梅雨の季節となる。これからは梅雨なるとかと、「梅雨」の前後に語を付けた句が、どこの結社でも量産されよう。果たして佳句として人の心をうつ句が、どれくらい生まれるものか楽しみである。

私は「青梅雨」という季語が好きである。青葉若葉をるいと濡らして降る雨を見ていると、自分も獣のように濡れている感じになる。また夜などに雨音を聞くと、夜の底を漂流しているような思いにさせられる。若い時に「青梅雨の底へ底へと読みすすむ」と詠み、褒められていい気になっていたが、そのずっと以前に登四郎先生の「どごよりか青梅雨の夜は藻の香せり」という、私の思いを深化させたような名句があることを愕然としたのであった。

蒼茫集



円陣 頓所友枝

人を悼む 辻美奈子

北上川の水音を泳ぐ鯉幟
藤まつり一人身を置く棚の下
木洩れ日を纏ふ幼子聖五月
平川門出でて出会はず夏祭
入魂の空(くう)切る梓や夏祭
* 円陣を組んで噴水立ち上がる

* 夏近し波音たてて洗濯機
夏葱に金属音のやうなもの
一茎の果てにカラーとなりひらく
てふてふが軍事境界線を越ゆ
亡き人のみんなやさしき椎若葉
春星の光年隔て人を悼む

早池峰句碑 望月晴美

風に色 能美昌二郎

薰風やまた早池峰の碑にまみゆ
* 蛙田の真ん中にある暮しの灯
麦の秋今も水車のある農家
挿し木して看取りごころの霧を吹く
落花浴びかもめの舞は水の精
手裏剣のやうな速さの目高の子

風に散り風に集まる花筏
* 春障子風に色あり光あり
微睡めば虻の羽音の高鳴りぬ
囀りも棚田も海へ傾けり
グローブを拳で叩き夏に入る
亀鳴くを昨日聞いたと学士どの

糸くぼ

栗原公子

酒買ひに

千田百里

* 永久齒生え初むぶらんこ高くてかく
をさな児の肘の糸くぼよ若葉光
たんぽぽの原つば遠き日の記憶
若葉風歩けば忘るる程の憂さ
角たてぬ言葉さがすや花卯木
献杯のグラスにしづく朧の夜

明易し厨に週間料理表
父の日の夫酒買ひに行つたきり
夕刊の来てまだ暮れず芥子坊主
仕事師の新しい地下足袋祭くる
カルメ焼のふくらみ祭囃子かな
腕組の先師を探し祭中

環太平洋

上谷昌憲

畦の正装

菅谷たけし

* かたつむり環太平洋に角を出す
たんぽぽの絮に残照宿りけり
体育館の乾拭きの床みどりさす
マーラーの交響曲や紫蘇の花
水母見る大水槽に額当てる
合飲の葉のはや眠り初む夕薄暑

夕闇の中に明るき水張田
藤は地に悔は心に垂れにけり
* 畦塗りの済みて正装めくひかり
シルエットめく田植機の往き来かな
横利根の幅を並んで鯉のぼり
水鉄砲一撃で兎に降伏す

五月来る

大畑善昭

行く春の妻にせがまれをりしもの
* 堅香子も祈りのかたち津波の地
次女三女いまは子育て五月来る
閨秀の二人の句集君影草
啄木祭うぐひすも声ころがせり
みちのくは朴の花どき登四郎忌

牛の反芻

藤原照子

目つむりて牛の反芻山笑ふ
* 西行庵奥千本の花隠れ
身のほどのけふの日程新茶汲む
半世紀のえにしや恩や朴花忌
投網打つ心棒となり身のひねり
錠剤を半分に分り新樹の夜

サングラス

小山田子鬼

魚の値を聞くサングラスはづしけり
* おむすびは心のかたち袋掛
辛夷散つて空の高さの戻りけり
書くことにけふ倦みてをり夏燕
日焼けせし灰かなやつれさすりをり
露味噌の香の深酒となりにけり

水張田

宮内とし子

* 手の届く山もありけり水張田
花わさび伏流水の声やさし
塩の道かげろふ中に資料館
つちふるや書店に並ぶ長寿本
前ぶれは研師来る日や夏隣
夏来たる羽根の付きたる焼餃子

潮鳴集



太平洋

齊藤 實

春の山小さき祠の細開き
蜃気楼海の彼方へうからたち
*潮干狩太平洋が後ずさる
山なだらかに雪溪の白たすき
*棧橋を離るる船に星涼し

通り雨

井原美鳥

陽炎や四つ葉を探す子供たち
母の日や水平線も入れて撮る
木の花の白のプライド夏はじめ
*蛇衣を脱ぐふたたびの通り雨
船々に船の名の旗祭くる

断崖

七田文子

林立のビル群直立の松の芯
*高層の玻璃の断崖つばくらめ
鳥の恋光をこぼし影こぼし
ワイングラス交はし立夏の音を酌む
竹皮を脱ぎいつまでも向上心

打診

森村江風

*荒神輿しやがれ怒声に熱り立つ
子燕の抜くる空みな真新し
垂直の街に垂直薄暑光
列島の腹打診する走り梅雨
葭切の昔語りか塩場あと

伊能 図

石崎 和夫

海光の棚田千枚畦を塗る
ビッグバンは神のひと吹き石鹼玉
春泥の鴨をそぞろに尋ねけり
空豆のたわわに風の海女畑
伊能図の汀線美しや夏つばめ

余花の村

塙 誠一郎

南部富士裾に余花ある村を置き
石割桜一房の余花抱きをり
武器蔵のとびら重たし若葉冷
糸遊や面影橋を往く都電
遠足や数へ直しの頭数

片 隅

辻前 富美枝

泥鰯屋はずつとどちやう屋橋灯る
蟻地獄あるがままなる出入口
論客の片隅に居てビール干す
幸せのかたち行きつく豆ご飯
* 更衣一步前進できるかも

練り辛子

佐々木よし子

平穏な一日筭尽くしかな
* 揚雲雀光となりてなほ鳴ける
虚子の句碑路のしうとめ囲みかな
屋久杉の木目涼しき椅子に座す
初夏の鼻突き抜くる練り辛子

蘆の角

大沢 美智子

スニーカー白より白く入学す
海は鍵盤春光を弾きては
* 蘆の角ふつと新元号のこと
城址の曲輪を浚ふ桜まじ
細巻きの男傘干す荷風の忌



飛鷹選評



能村 研三

網元の土間は卯浪へつづきけり 栗坪 和子

網元の制度は現在廃れてしまったが、江戸時代古文書が書かれた時期、房総では鱒漁の大漁の好景気により有力な網元が数多く登場した。その資本たるものは大名に比肩するほどであったと言われ、江戸から文化人を招いては逗留させ、贅沢三昧の毎日を送っていたそうだ。その家の造りも見事で、土間から大きな長屋門を潜ると海に直接行き来ができるような造りの家であった。この句の眼目は土間が卯波に続いていると表現したところである。卯波は波の白さを卯の花の白さにたとえたところから名付けられた。

樹々はみな翼を得たり若葉風 岡本 秀子

すがすがしい若葉の季節は自然だけでなく身のまわりのものすべてが息づく季節である。若葉はおもに落葉樹の新葉のことをいう。若葉を洩れくる日ざし、若葉が風にそよぐ姿はいずれも美しい。木々はうっそうとした茂りでなく、葉の重なり具合も軽やかで、風に吹かれると翼を得たような動きを見せる。

転舵して円き水脈描く浅蜷舟 中西 恒弘

中西さんは、市川の行徳にお住まいの方。近くの三番瀬は潮干狩りもでき、潮が引いた浜に人が押し寄せる。サッパ舟などを使って沖の浅瀬まで行って浅蜷採りをする人もいる。小さな舟などで、転舵もさほど難しくなく小回りを利かせながら、次の浅瀬へと向かった。

軒寄せてポンプ井戸守る小米花 大橋 松枝

東京例会の吟行で本郷菊坂の樋口一葉旧居跡を訪ねた時の句。今回私は吟行に同行出来なかったが、路地裏の木造家屋が軒を寄せ合ったところに手押しポンプがあった。この井戸をおそらく一葉も使ったと思いつつその面影を偲んだ。井戸のほりには小米花が咲いていた。

漆黒の額装のごと畦を塗る 稗田 寿明

田の畔から水や肥料が流出しないように田植えの前に畦の表面を田圃の泥土で塗り固める。昔は鋤や鍬などを使って人力で行われていたが、今は畦塗機がその役目を担っている。塗り終えた畦はまるで漆黒の額縁のようにてらてらと輝いていた。

春暑し安田講堂のシンメトリー 鈴木 光影

シンメトリーとは造園や美術の世界で使う言葉で左右対称のことをいって、非常に安定感がある眺めだ。安田講堂と言えばこの句の作者が生まれる前東大紛争の舞台になったところで、そんな記憶が蘇ってくる。このシンメトリーの建物は権威的にも見え威圧感を感じさせるのかも知れない。

頭角はあらはさぬまま 蝸牛 大久保志遠

蝸牛という子供に唄った童謡の「かたつむり」を思い出す。歌の一節「つのだせ、やりだせ、あたまだせ」、この句もこの歌の一節を踏まえているのか二句一章の句としてまだ頭角をあらはさぬ人間に焦点を当てたところが面白い。

来し方を逆さに浮かべ 蟹気楼 道端 齊

蟹気楼は遠方の街が海上に浮き上がって見えることをいう。作者は富山県の方だが、魚津あたりの海で見られる現象。これまでの人生を振り返りつつ反転した虚像の中に自身を来し方を見るような思いがあった。

暮の春生きいきと止まること 河寄 祐二

暮の春は春の終る頃という意味と春の日の夕暮れの二つの意味がある。行く春ほど主観的に使われず、とりとめなく用いられることが多い。この句の場合は春の終わる頃と解釈したい。生きいきととは一生を走り抜けることだが、晩春の季節の中でこれまでの来し方を振り返った。

そのかみの安田 若葉風 嶋本 博司

さきほどの鈴木さんとは世代も違い、同じ安田講堂も「若」という言葉が自然と出てきた。今は静かに若葉風に吹かれていたが、かつては安田若を見つづけるいろいろな思いが募っていた。

囀のさやかに朝のパンを切る 棚橋 朗

日常の何でもない風景だが、この当たり前の事こそが大切に囀の声を聞きながら今ここに生きていることをありがたいこと

と素直に思うことが出来た。

一瞬を生き切る光しやほん玉 小形 博子

この句、二句一章の句として捉えたい。「一瞬一生」という言葉があるが、一瞬一瞬を大切に生きてこそすばらしい一生が出来上がる。しゃぼん玉も一瞬にたくさんの光を放つ。

*

蛇衣を脱ぐふたたびの通り雨 井原 美鳥

蛇は脱皮により成長する。中々その瞬間を捉えることが出来ないが、脱皮殻が草間や垣根に残っているのを作者は発見した。蛇の形がそのまま残ったものを見た時の驚きも治まり再び通り雨に見舞われた。

潮干狩 太平洋が後ずさる 齊藤 實

この句、太平洋という固有名詞が俄然幅を効かす。潮干狩で浅瀬でしばし立ち上がった瞬間、沖へ引いて行く波を見て大きな気持が過った。

(潮鳴集より)

蛙田の真ん中にある暮しの灯 望月 晴美

田圃などで鳴く蛙の声は晩春の田圃風景の中でなつかしく聞こえる。賑やかな蛙の声を聞きながら田に囲まれた一軒の農家が灯りを水田に映していた。

円陣を組んで噴水立ち上がる 頼所 友枝

「円陣を組んで」の擬人化がうまい。楽しい句である。

(蒼茫集より)

沖作品



能村研三選

亀鳴くや樋口夏子は執筆中
塗蛙の光れる道を渚まで

市川

栗坪 和子

* 網元の土間は卵浪へつづきけり
搾乳の桶にれんげの香りせり
海近き駅に降り立つ端午の日

千葉

岡本 秀子

山間の蛙塗の音響きけり
淋しさを耕す後姿かな
囀や五百羅漢を目覚めさせ
桜蔭ふる酒蔵の酒深ねむり

市川

中西 恒弘

* 樹々はみな翼を得たり若葉風
研修中てふバスに乗る薄暑かな
* 転舵して円き水脈描く浅蜷舟
サンド・バッグ打つ春愁のをみなかな
パステルで描く囀印象派
蘂や古代住居の厚き屋根

東京

鈴木 光影

* 軒寄せてポンプ井戸守る小米花
鶺鴒の子の水掻く巢屑つけたまま
農小屋に磨り減る砧みどりの日
緑さす鳥居のトンネル根津稻荷
蟻が蟻引きて迷へり城の道

埼玉

大橋 松枝

アドリブのさへづりに間のありにけり
道端のホイールキャップに花の雨
選挙事務了へて夜明けの残り花
手の甲にペンの書きあと新社員

千葉

稗田 寿明

* 漆黒の額装のごと蛙を塗る
* 春暑し安田講堂のシンメトリー

注釈のやうに初蝶留まりをり
春愁の壁はボールを跳ね返す
吾の影に人驚くや春の宵
きはやかにしづかに躑躅巫女のごと